

日本語には、他の国のことばにくらべて、「虫」の語のつく表現が多い。思いつくままにあげてみると、飛んで火に入る夏の虫

一寸の虫にも五分の魂

蓼食う虫も好き好き（人の好みはさまざま）

虫も殺さぬ顔をして、あんなことをするんだから

かわいそうにあの娘、悪い虫がついて

やはり虫の知らせだったか、妙に朝から胸騒ぎがして

あまりにも虫がいい話だ

うちの亭主、また悪い虫が起きて

駆けつけたときは、もう虫の息だった

気をつけな、親方は虫の居所が悪いから（ふだんと違って、何かにつけて機嫌が悪い）

腹の虫が収まらない（気を鎮めようとしても、思い出すと怒りのやり場がない）

虫が好かぬ

虫を殺す（癩癧の起きるのをじっと我慢する）

ふさぎの虫

虫抑え（子どもに癩が起きないように飲ませる薬）

虫が起こる、虫気を起こす。（子どもが癩を起こしたり、回虫や栄養不良のために病気になること。また産気づいたことを虫気が起こる、ともいう）

本の虫、仕事の虫

弱虫、泣き虫

これらの表現を英語に求めてみると、直接「虫」の語をもちいているのは、a bookworm（本の虫）と Even a worm will turn.（虫でさえ立ち向かってくる。↓一寸の虫にも五分の魂）、そして Some insects prefer bitter leaves of knotweeds.（蓼食う虫も好き好き）くらいなものであろう。しかも a bookworm は もともと

本につく紙魚のような虫のことである。「あの娘に悪い虫がついた」と日本語に訳すことのできる表現はあっても、原文では「好ましくないボーイフレンド」などの語が使われているのであって、「虫」ということばが使われているわけではない。したがって、「虫」ということばのつく表現が日本語に多いことは、日本文化のひとつの特性であるといってもよさそうである。

たとえば、長屋のおかみさんが、ばくちにいつてしまった夫を嘆いて、「うちの亭主、また悪い虫が起きて」といつている場面を想像してみよう。「悪いのは亭主本人ではない、悪い虫がそうさせるのだ」というおかみさんのつぶやきには、亭主を徹底的に追いつめてしまわない、どこかに逃げ道を残しておいてやるようなところがある。相手を追いつめてしまえば、そこには破局があるだけである。何かわからない「虫」のせいにすることによって、救われることもあるであろう。これは人生の知恵とっていいのかもしれないが、また物事に黒白をつけることを嫌い、あいまいにしてしまう日本人の習性と通うところがあろう。

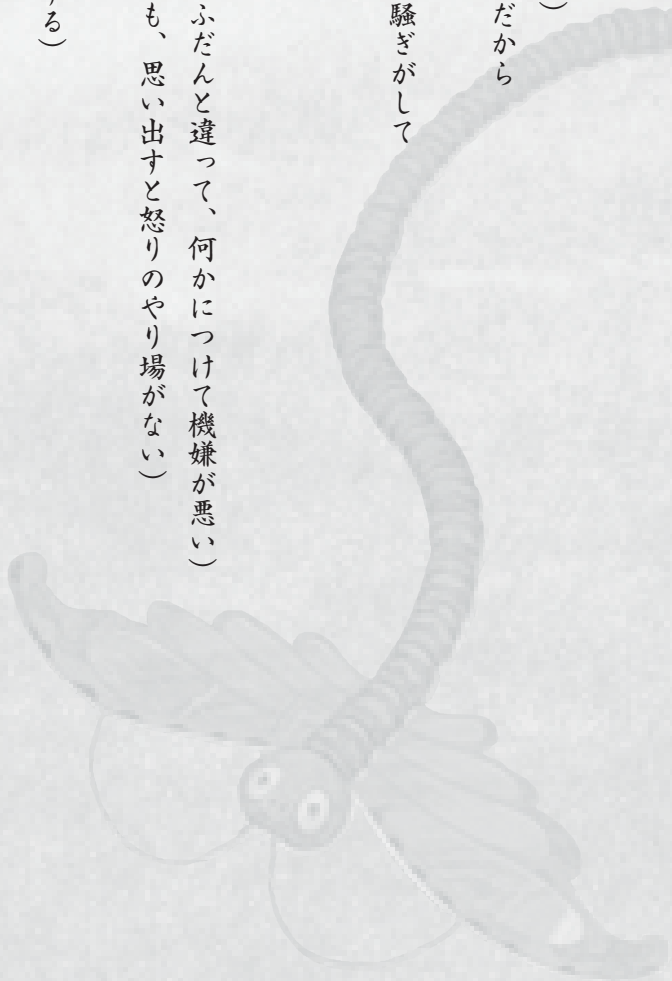
だが、これらの表現は、そんなに古い時代から使われていたわけではない。右にあげた例の中では、「虫の息」「虫が起こる」などが古いものである。

古いとはいっても、室町時代ごろからのことで、「虫の息」は天文十八年（一五四九）の『石山本願寺日記』の記事が今のところ初見らしい。子どもが癩を起こしたり、回虫などによって腹痛を起こすことを意味する「虫が起こる」は、桃山時代にイエズス会の宣教師たちがつくった日本語の辞書である『日葡辞書』に載っている。ほかは、雑俳や浄瑠璃、歌舞伎、そして黄表紙や滑稽本などに見られるもので、江戸時代の中ごろから末ごろまでにあらわれてくる表現である。

その中で「虫の知らせ」という表現は、延享三年（一七四六）に初演された人形浄瑠璃最盛期の傑作とされる『菅原伝授手習鑑』寺子屋の段に、「はや虫が知らせたか」とあるのがもっとも古いようである。

『菅原伝授手習鑑』は、菅原道真が太宰府に流されるまでのいきさつ、死後に雷となって悪人たちを討ちほろぼし、天神として祀られるまでを描いた作品である。

菅原道真が大宰府に流罪になったのち、藤原時平は、菅原道真の子、菅秀才を亡き者にしようと討手をさし向ける。道真に忠誠をつくす三兄弟のひとり松王丸は、菅秀才を助けるために女房の千代とはかって、ひ



肺積



ハシヤノハ五臓ノクワカイリル
 間上ニ生テハ積オ生テ鼻
 肺ノ穴ヲ間セテノニオイヲ
 ニリミナニクサキカラロニカラキ
 アキヲアム常ニカナシムフヲ去
 ハ其肺ノ病カキ其色白カ
 ルハ是有人ハ肺煩セ積
 右ノ脇ヨリ亮也トサキミラフ是
 オナツケテ積ト是ハ何モ針
 ヤラカニサタツル也

肺積

●はいしやく●
 肺は華蓋（華麗な蓋）に喩えられるように、最上部（胸先）に位置するので、肺積（息貫ともいう）もそこに発生する。鼻は肺に通じる換気口である（したがって肺積の鼻は大きく嗅覚が過敏である）。いい匂いでもないやな臭いでも嫌うのに、生臭い悪臭だけは好むようになり、辛い味を好み、いつも悲しみにくれている。発生源は肺の臓で、肺は五行の「金」に配当され、イメーヅカラーは白なので、肺積の色も白い。このような人物（辛党で生臭さ好き、悲観的で色白）は肺を煩っているのである。肺積は、右の脇腹に発生して（横向きの小さいほうが幼虫）、やがては胸先を覆い尽くしてしまう（成虫は心に掛かった雲である）。この段階で肺積と名づける。どの症状に対しても、鍼は柔かく、浅く立てる（強刺激だと、痛みに耐えかねて泣き出す）。

心積



心積者テワリヤトス
 上ニ生テスキニ生スナリト人
 ナニナリ南方ノ火ナリ間
 エシヨツテ血ヲ生ルナリ鼻
 クサキ 香オカリロニハワラウ夏
 ラエタリニカモノヲコノム心ヨク
 シヤカシク心ノ病ヤ
 針ノ立積ハ何カクノムヤ
 カタニナシハナラリカキ

脾積

●ひしやく●

脾臓の積は、名づけて痞気（※原文の「病氣」は誤り）という。脾の周囲が居場所である（赤い五角形が脾を象徴）。発生源（脾、方位では中央）は、五行の「土」に配当されるので土用（季節の節目、特に夏秋間）に煩いやすい。脾積は甘い味を好み（甘味に目がなく、喉から手が出る表情）、いつも鼻歌を口ずさみ、顔色は黄ばんでいる。このような症状は、脾積が起す。鍼は、脾から一寸の距離を隔てて上下左右に立てる。成虫は、長血（月経過多）や白血（オリモノ）を起こし、腰を立たなくする。女性にとっても多い。鍼の立て様には口伝がある。

脾積



脾ノ臓ノ積者テ病氣ト云
 脾ノウリニ生テハ生ハス間南
 ナラフテ煩也ロニミナヤキヨム
 ウメウソフコトヲナス面ノ色
 黄ニアラハハ積也針ハ脾ノ
 マリヲ一寸ノケテ立ル方
 シタ也ハ形ニナシハ長血白血
 コミタズ女ニモツトモアリ
 立ヤラハス

心積

●しんしやく●

心臓の積は、名づけて伏梁という。膈より上（胸部〜上腹部）で、だんだん大きく成長していく。上（胸）は人氣（心、意識）のありか、方位では南、五行の「火」に配当され、イメーヅカラーは赤なので、心臓は真っ赤な血を生成する。（心積の）鼻は焦げ臭い香りを好み、口元に締まりがなく絶えず笑っていて、苦い味を好む。意志薄弱で、顔面の色は赤い。このような人物は、心臓を病んでいる。鍼の立て様には口伝がある。図のように、早々と成虫となったものは治りにくい。

針聞書という書名の由来

九州国立博物館収蔵の『針聞書』が編集されたのは永禄十一年（一五六八年）、これは茨木元行（いはらき げんぎょう）という戦国時代に活躍した鍼治療（以下、鍼治と略称）の名医の手による古写本である。

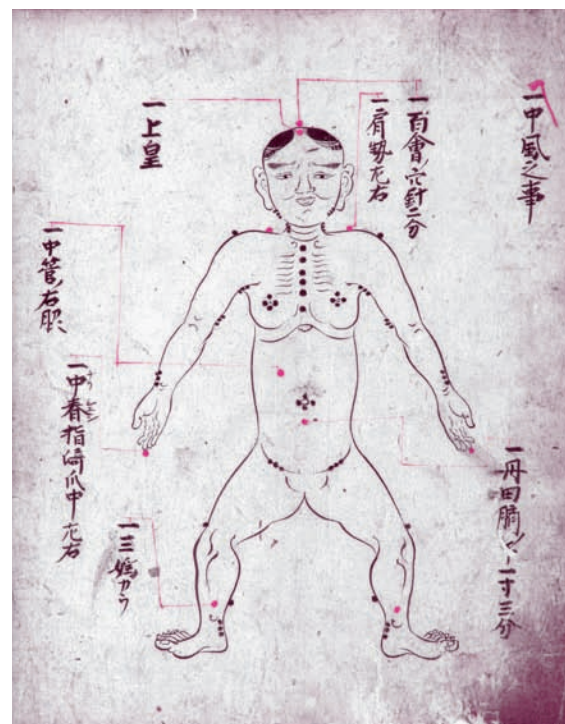
さまざまなハラノムシの絵とともに病状や療法、ムシたちの棲息する五臓六腑の構造・機能が、およそ半分の紙数を割いて詳述されている。残る半分は鍼治に関する記述である。本稿では、私の専門である鍼灸治療の視点から、『針聞書』を書誌学的に解体しながら、戦国時代の鍼灸治療の実情に肉薄してみたい。

実は、針聞書という三文字は、この古写本に与えられた書名というよりも、鍼治に関する全九十七条の口伝集に付けられた篇名とみなすべきものである。なぜなら、現在の古写本の表紙は一五〇年から一〇〇年ほど前の比較的新しいもので、執筆当時のままではないからだ。江戸末期から明治前期にかけて、裏打ちなどの修補に伴って付け替えられたものである。原本には題簽（書名を記した紙片）はあるのだが書名は見られない。もしかすると、短篇の寄せ集めともいえる本書には、最初から全体を通して書名は付けられていなかったのかもしれない。

以下、正確を期すために、本来の篇名を示す場合には「針聞書」、書名として用いる場合には『針聞書』と、カギ括弧「」と二重カギ括弧『』の違いで両者を書き分けることにしたい。

そもそも、短編の寄せ集めである鍼治の教本に、『針聞書』という現在の書名が与えられたのは、二〇〇二年五月のことである。大阪古典会という古書市に本書が出品されたときだ。オークションゆえ、本書の出所はもちろん出品した店名すら明かされていないが、この書肆（書店）が『針聞書』を書名とした理由はいたって単純である。

納品に立ち会った九州国立博物館の東昇研究員によれば、本書を包んでいた帙（ちづ）には書名はおりか何も書かれておらず、帙を収める桐箱などはなかったという。つまり、第一篇の篇名がそ



『針聞書』には、症状別にツボの位置を示す人体図が15ページにわたって紹介されている。
腹痛（疝痛）を起こす積、癰癤と関わる聚、半身不遂の中風、神経痛・関節痛の五痺、脚気、婦人病（血の道）、眼病、頭痛の8疾患を取り上げており、戦国時代にはこれらの鍼治をマスターすれば、一人前の鍼立として活躍できたようだ。

“針聞書”の文字は、表紙ではなく、1ページ目にある。

